
寂しいと鬼は死ぬ

エクス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

寂しいと兎は死ぬ

【NZコード】

N7134Z

【作者名】

エクス

【あらすじ】

感情も家族もない天涯孤独な主人公、獅子ヶ原守が兎を拾い徐々に感情を手にいれていく話。

オタネタが結構多いかもしません（笑）

プロローグ（前書き）

読んでくださると嬉しいです

プロローグ

孤独ってなんだろう？

ボツチでいることが孤独なのだろうか？
寂しいって感じたら孤独なのだろうか？

そんな俺の物語

§ § § § § §

小学校卒業の前日の事だった
事故で俺、獅子ヶ原守しじがわらまもるは父ちちを失った
事故なんてしようちゅう起こつてることだ
それが身内で起こつただけだ
悲しみなどはなかつた

……今思えばやつぱりこの頃の俺は冷めてたんだな。

母は俺を産むと同時に死んでいる

親戚はいない

本当に呪われてんじやないかと思えるな

俺は天涯孤独の身となつた

施設に入るかと言つ話がきたが断つた

俺は寂しさというものをもつていなかつた

いや、寂しさだけじゃない、感情そのものがなかつたんだ

とある・・・。わけで金は座っていてもどんどん入ってくるから
金に困ることはなかった

感情のないまま本能に従つて中学一年間を過ごした

朝遅刻するのは当たり前、授業もサボりの常習犯、だけど成績だけ
は常に学年トップだったから先生に怒られることはなかった

そんな事に不満をもつて絡んでくる奴も少なくなかった

俺はそんな奴の相手をしていくうちに孤独な不良の地位を手に入れた
だけどどうでもよかつた

あの頃の俺は何も考えてなかった
あのウサギが転校してくるまでは、な

神様は何を考えているんだらうな

§ § § § § §

中学三年の一学期の始業式の日、俺は珍しく式に間に合つてしまい、校長のありがたい（？）長文を聞いていた

「夏休みはどうでしたかね。1、2年生は部活や恋愛3年生は受験勉強に忙しかったと思います（以下略）

しかし俺のまわりは

『なんで獅子ヶ原が来てるんだ』

『しつ、よせ聞こえるって』

『それにしてホントに珍しいね』

『触らぬ神に祟りなしだぞ』

と俺が来たことに驚いてることが多かったのだ

全部聞こえてるのにバカなのだろうか

とそんなどうでもいことを考えて、式は終わり教室に戻ることになった

教室に戻つてから夏休みにサーフィンにでも行つてきたのかと言えるほど黒く焼けておりムツキリとした担任教師、えーと名前は……ととりあえず皆から筋肉先生と呼ばれている先生だ

その筋肉先生が

「みんな、きいて驚け！！なんと転校生だ。」
とドヤ顔で言い放つた

ざわざわと教室に広がった

「せんせー、おと「女だ」」

誰かが定番とも言える台詞をいつたが言い終える前に筋肉が先手をうつた

「かわ「よし、入つてこいーー！」」

この教師は人の話を聞かない

ガラツ

教室の扉が勢いよくあけられた

そして身長は150センチ弱、髪は黒で兔の髪飾りをつけて、目がぱっちりとしてる一般的に可愛いと呼ばれる部類の女の子がはいつてきた

……眼帯をしてだ

「じゃあ、自己紹介をしてくれ

筋肉がいきると同時に少女も口をひらいた
だが普通の自己紹介とは言い難い自己紹介でだ

「我が真名はテーモンオブリビット、あの世から参った。」しかしの

世界での仮の名は唯野兔ただのうさぎ、呼ぶときはひりひりでもかまわないよ。」

そして名前を名乗り終えた少女は

「刮か田たせよ」

と眼帯をとり金色の目を見せた

恐らくカラコンだらう

「我が眼はラビットアイ、この眼にみせられたものはもつこの世には帰つてこれぬだらう。クツクツク」

……これが邪氣眼厨じきがんちく、病つてやつか
かかわりたくないな

ちょっと周りを見渡すと、他の人もそんな顔をしていました
いや、どうしかつて言つと俺と関わりたくないってか

「まあ、よくわからんが好きなとこ座つてくれ」
筋肉は対処の仕方がわからないらしくスルーしていた

と、そんな時に俺と転校生の目があつた

「……」

そして転校生はわざわざ俺の所までよつてきた

「クツクツク、おにいちゃ……お主、我が眼にみせられたな」

「何いつてんだ」こつは

『ねこにゃー、ちびてね』

周りは俺とは違う部分に興味をもつたようだ
俺はちびでもよかつたが

「はー、

ちゅうヒズスの効いた声に反応をすると

「うー、お、お主、我が眼にみせられたな

……なんでやうなおした?

それにちゅうと涙田になつてしまつた

「…………先生、席がわからないそうです」

俺はめんどくさかつたから筋肉になげた

「ちゅ、なんで、無視するう?」

やつべ、田の前の少女が泣きやうだ

くつそ面倒だな

ええーと、この前カツアゲをされた奴を助けてやつたときにもう一つ
が言つてたこと言つてみるか

「1)みんなで、1)なんともビビんな顔をしてここのかわからぬいわ

『綾波ー?』

おおー、反応多いな
そんなに有名な台詞だったのか
俺はせつかく助けてやったのにこんな事しか言わなかつた奴をとり
あえずぶん殴つて放置した

「……笑えばいこと思つよ」

『対応してきた！？』

？？？俺にはよくわからなかつたがこいつもんなのか？

「で、なんの用事だクソガキ」
もひ、本当にめんどくさかつたから少し聴しきみに聞いた

「うう、そなたは我が眼にみせられたから我が下僕になることを許
そつ」

「ああー！？」

「ふ、ふえ、ふえーん」

ついに泣き始めてしまつた周りの俺を見る目がつぞこな
「てめえら何みてんだゴルア、てかさつやとトメヒも泣き止め……」

「グスツ、下僕になつてくれるん？」

「ああー！？」

「うえーん、おにいちゃんが怒つたあ」

本格的に泣き始めやがつたそれにおにいちゃん？

「だれがおにいちゃんだ！？俺はお前の兄じゃねえぞ」

自分が何言つたか気付いたらしく
「別におにいちゃんなんていってないもん」

と赤くなつて訂正してきた

そして少し落ち着くのを待つてから

「で下僕になつてくれるん？」

と再び尋ねてきた

「だれがなるかよそんなもん」

「うう

でまた少し間を開けてから「なら、友達ならなつてくれるん？」
と顔を真つ赤にしながら尋ねてきた

その質問に俺は一ツコロと笑い
「イ・ヤ・だ」
と告げてやつた

少女はびっくりしながら

「なんでだめなん？」

ときいてきた

「俺は他人とつるむきはねえ」
と思つたままの事をいつてやつた

「……孤独をかっこことと思つてゐる歟、一病なん?」

イリッ

「そりや、テメーのことだらうが!…金輪際俺には近づくな…」

少女は悲しげな顔をしながらあいてる席に向かつた
『氣にすることない』
『私達が友達になつてあげるから』
『あんなやつ、一度と関わっちゃいけないよ』
とまわりの人に慰められてこる

俺はさつと退場することにした

「先生、帰ります」

「おお、やうか。氣を付けろよ」

『お前本当に教師か!?』

緩い先生で本当に楽だ

俺はそのまま帰るのも暇でゲーセンによつてから帰つた

次の日
俺はなんでこりずに遅刻しないで行つたんだろう

「おはよう

教室に入つてから珍しく俺に挨拶をしてくるバカがいた
どこから声がしたかと捜したら、声の主は俺の席に座つていた

そう、あの唯野とかいった少女だ

「クツクツク、やつときたか我が下僕よ」

「こりねえ、奴だな

「邪魔だ、どけ」

「なんでそんな敵対心むきだしなん?」

「別に敵対心はだしてねえぞ。邪魔なもんに邪魔だといつただけだ」

「うう」

唯野は悲しげな顔をしながら自分の席に戻つていった

それから唯野は休み時間のたびに俺の席に寄つてきて話しかけてきた

§ § § § § §

最初は「うるさい」と追い払つたが次から無視したのがいけなかつたか一方的に話しかけてくるようになつてしまつた

なんでこんなになつかれたかな?

「クッククック、我が下僕よ、我に供物をやれげよ」

「ああ！？」

なんでたうづ、この言葉ばつか使つてゐる氣がする

「うづ、うづ、飯詰れちやつた

なんだそりこりことか

「ホラよ、食え」

俺はもつてきた手作り弁当をやつた

「えー？」

わざわざまでと違つた態度に困惑つてゐるよ、うづだ

「……シンテレ？」

「ちげーよー？何でお前はたつた一つの親切で人をシンテレにするんだよー？いいからありがたく食べ。そして俺にこれ以降近づくな

「お弁当あつがどう。でも近づくなつてのまやだ」

「なんとい、」こつは俺の句がいいんだうつな？

「守、自分の分は？」

いきなり下の名前で呼んできせがつた
ほんとい、なんなんだよ……

「ねえこわせつてんじゅ ねえか

「え？」

びっくりしたように俺と弁当を見比べる

それから句を思つたか

「あーん」

とタコ🐙をウインナーをさしだしてきた

『ー！？』

どつから驚いたのは俺だけじゃなかつたらしく

「あーんつてば

「ああ、こりねー

俺は断つたが

「あーんつてばーーー

なぜか押されてしまつて迷つたあげく

と俺の腹の虫がなつてしまつた

「はー、あーん

「くそつ

俺はしぶしぶたべた

『キヤー』

周りからはなんともいえない声があがつた

「おいしい？」

バカなのかこいつは

「俺が作ったんだからうまいに決まつてんじゃねーか。お前の手柄
じゃねーよ」

「そうだったね」

テレッとしながら

「お主の供物、満足じや。明日からも我に捧げるがよい」

「はあ！？俺に毎日作れってことか！？」

「……うん。前の学校給食だつたし弁当の作り方わからないもん」

だからつて普通他人に頼むか？

「ちつ、しうがねーな」俺はお人好しなのか

『ツンデレ』

ブチツ

「だれだいま俺を変な名称で呼んだバカは！？表にでやがれ

でるわけもなく昼休み終了のチャイムがなつた

で、結局今日は最後のホームルームまでやつて帰った
この時俺に感情が出始めた事に俺はまだ気付いていなかつた

「我が下僕よ、主の俗世における魔道具の契約番号を我に教えるがよい」

登校一番にそんなことを叫ばれた

……魔道具つてなんだよ

よし、帰ろう

「人違いです」

回れ右をして俺は帰り始める

「ちょ！…なんで無視するん！？」

後ろから自称魔眼持ち（笑）が追ってきた
よし、前に絡まれてたところを助けてやつた奴（一回目）がのたま
つてた事をいうか

「逃げちゃダメだ」

『『『『『『『『

ホント、律儀なやつらだな

「……あなたは死な（以下「」）

『『『『『『『『

『『『『『『『『

次は財布を落として困つてた奴（絡まれてた奴）がいつてた事だ

「ただの人間には興味ありません」

『『『『『『『『

「私は……じゃなかつた我はただの人間ではないぞ」『『『『『『『『

「でもお前は唯野じゃねーか

『そうですね！！』

もつ面倒だし話を進めるか

「で結局なんの「ホームルーム始めるやん」……」

筋肉が空氣を読まずに話を中断させた

しうがなく俺は教室に入つておとなしくホームルームをうけた

§ § § § § §

「我が下僕よ、主の俗世における魔道具の契約番号を我に教えるが
よい」

筋肉が出ていつた途端唯野はやり直してきやがつた

「……魔道具つてなんだよ

「これの事だよ」

そういうつて懐からケータイを取り出した
めんどくさい奴だな

「ほらよ

「……」

素直に出した俺に驚いていよいよひだ

「ツンデレ？」

「だからちづーよ！？なぜいきなりツンデレになるー・？
「えつと、赤外線のやり方はと、」

「話を聞けよ！！」

唯野は「一人といつなつてからやつと見つけた赤外線のやり方に喜んでいる

「じかたよおここや 我が下僕よ」

「俺はお前のお兄ちやんじやねーぞ。てゆーか間違えるなよ」「俺がお兄ちやんと口にした途端唯野の顔が暗くなつた。あまり触れていい話じやないようだな

「まあいいや、それとほりよ。今日の弁当だ」

「....」

「昨日自分が言つたんじやねーか。弁当作つてこと

心底嬉しそうな顔をして

「シンテ「それ以上いつたら没収だぞ」 ありがとひ

余談だがその日から俺の異名は『孤独な不良』から『シンテルマニアック』に変わった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7134z/>

寂しいと兎は死ぬ

2011年12月25日22時04分発行